

歴史まち歩き

飲み水から名古屋友禅まで、名古屋城下の暮らしを支えた水路

6

御用水 黒川

コース【地下鉄黒川駅▶上飯田線上飯田駅】

名古屋城のお堀の水源として開削された「御用水」。名古屋城築城後、人口増加に伴い、庄内川から水を引くため水路が掘られました。まちの発展を見守り、明治以降はきれいな水を利用して染物業が発達しました。今では御用水沿いに桜の木が植えられ、市民の憩いの散歩道となっています。

1 北清水親水広場(きたしみずしんすいひろば)

かつての黒川船着場だった場所が整備され、親水公園となっています。すぐ上流の黒川橋には、主要街道「稲置街道」が通ることから、舟運と陸運の交点として利用されていました。平成20年(2008年)3月には、自然に地下水がわき出す「清水わくわく井戸」が設置され、湧水が堀川に放流されています。都会でこのように地下水が自噴する井戸は非常に珍しいものです。また、頭上には巨大な丸メガネのような形をした、名古屋高速道路のツイン・ループがあり、天敵である猛禽類から襲われる心配が少ないことから、様々な渡り鳥たちの楽園となっています。

2 旧木曾街道(きゅうきそかいどう)

上街道(うわかいどう)とも呼ばれた旧木曾街道は、名古屋から小牧、善師野、土田の各宿を経て中山道伏見宿(現在の岐阜県可児郡)に至る街道です。犬山城主の成瀬氏が年頭に名古屋城へ出向くのに利用したため「名古屋往還」とも呼ばれていました。尾張藩が設置し、中山道を通る参勤交代の道として使用した街道でしたが、当時は松並木や一對ずつ築かれた一里塚など、幕府管轄の街道に劣らぬ整備がされていたといわれています。このあたりは旧道のままの道幅を残し、当時の面影を偲ばせています。

御用水(ごようすい)

御用水がつくられたのは、名古屋城や堀川ができてから約50年後の寛文3年(1663年)です。町に住人が増え、水の需要が高まったため、庄内川から水を取り入れ、お堀まで水路がほられました。これが「御用水」です。お堀の水を木のマスやトイ、竹を使って各家に配水する「巾下水道(はばしたすいどう)」がつくられ、堀川の西の町でもおいしい飲み水が手に入るようになりました。その後、明治10年(1877年)に黒川がつくられた時に、水分橋で庄内川から取水した水を、三階橋近くの黒川分水池で御用水に分けるようになりました。明治時代になると、川ぞいには御用水や黒川のきれいな水を利用して、布に色をつける染物業が増え、名古屋一の染物工業地帯になりました。御用水が無くなった今でも名古屋友禅の染物工場が残っています。



名古屋友禅(なごやゆうぜん)

名古屋友禅は18世紀の前半、京都の友禅技法を、名古屋を中心とした尾張で吸収し発展していった技法とされています。この地域では伊勢型紙などを利用して染める型友禅の伝統を今に伝えています。名古屋友禅は、以前は京都の友禅と同様に絵柄も派手でしたが、7代尾張藩主徳川宗春の蟄居以降、地味なものへと変わっていったそうです。

4 黒川樋門(くろかわひもん)

庄内川から黒川(堀川)へ用水を引くために設けられた樋門(ひもん)であり、矢田川の地下を通り、ここから黒川へ流れ込みます。3連の樋門に2つの石段があり、巻上機の上屋は木造で復元されています。樋門の上も人が通れるようになっていることから、黒川の景観をより身近に感じさせるものとなっています。

3 羊神社(ひつじじんじゃ)

社名は、群馬県多野郡芳井町にある「多胡碑」に刻されている「羊太夫」(多胡郡の領主)に由来します。奈良の都へ上る時に立ち寄っていたゆかりの屋敷がこの地(現辻町)にあり、この土地の人々が平和に暮らせるため「人心を安らかに」という願いを込めた羊太夫が、火の神を祀ったといわれ、羊神社と呼び称えるようになったと伝えられています。創立年月日は不詳ですが、延喜式神名帳に「尾張の国山田郡羊神社」と記されていることから1,000年以上の古社であると言われています。12年に一度の末年には全国から多くの参拝者が訪れます。

御用水跡街園(ごようすいあとがいえん)

堀川(黒川)沿いの散歩道として親しまれている御用水跡街園(ごようすいあとがいえん)。この御用水も、まわりに家が建ち、水を取り入れる庄内川の水も汚れてきたので、だんだん利用されなくなり、ゴミすて場ようになっていきました。このため、夫婦橋(めおとばし)から猿投橋(さなげばし)までの約1.7kmをうめて堀川(黒川)沿いの散歩道にする工事が、昭和47年(1972年)から昭和49年(1974年)に行われました。今では植えられた木も大きく成長し、散歩の人も多く、春には桜の名所として花見客で賑わっています。